

第6回「松尾賞」の公募要項

「認定NPO法人日本ホルモンステーション」では、2021年度 内分泌代謝学に関する基礎研究の分野への顕彰事業として、第6回「松尾賞」の候補者を次のとおり公募します。

第6回「松尾賞」

受賞対象者： 内分泌代謝学に関する基礎研究の分野において卓越した業績を有する満60歳以下の研究者で、注目すべき優秀な研究業績をあげており、今後更に発展が期待できる研究者に贈呈します。

贈呈数： 原則として1名

内 容： (1) 賞牌(盾) (3) 副賞(研究助成金30万円)

締 切： 2021年2月28日(郵送の場合は、当日消印分を認めます)

応募規定： ① 応募には、当法人様式による研究奨励賞申請書、研究概要、業績目録推薦書の添付が必要です。

(申請用紙一式は当法人ホームページよりダウンロードしてください)

② 候補者は、2021年4月1日現在で60歳以下であること。

審 査： 審査は当法人選考委員会において行い、5月上旬に結果を通知する予定です。

授与式： 2021年7月開催予定の「第39回内分泌代謝学サマーセミナー」期間中に行う予定です。

既受賞者：

第1回	(平成28年)	柳沢 正史	博士	(筑波大学)
第2回	(平成29年)	宮田 篤郎	博士	(鹿児島大学)
第3回	(平成30年)	児島 将康	博士	(久留米大学)
第4回	(令和元年)	小川 佳宏	博士	(九州大学)
第5回	(令和2年)	櫻井 武	博士	(筑波大学)

その他お問合せは下記まで。ただし、審査経過等のお問合せには応じかねます。

認定NPO法人 日本 ホルモン ステーション

〒606-0805 京都市左京区下鴨森本町15番地 (財)生産開発科学研究所内

Tel: (075)-708-1080/Fax: (075)-708-1088

E-mail: npo-hsj@nifty.com

Vol. 13
June,
2020

News Letter

日本ホルモンステーション

第13号

日本ホルモンステーションは

- ① 内分泌代謝疾患に関する一般市民への啓蒙活動
- ② 若手研究者の育成
- ③ 国際交流

に取り組む認定NPO法人です。

卷頭言

Covid-19大流行に対する正しい生活習慣とホルモン



中尾 一和

京都大学名誉教授

認定NPO法人日本ホルモンステーション理事長

Covid-19 大流行で、4月7日には緊急事態宣言が出ました。戦後生まれの私達には初めての経験です。私には、マスクをして、御所と鴨川べりの散歩が唯一の気分転換となりました。3月以来京都の観光客は激減して、京都の歴史と自然を久しぶりに市民に取り戻せたようにも感じています。その上、今年は気候のせいで、京都の桜を比較的長時間楽しめました。「哲学の道」の桜、法然院の椿などを、ソーシャルディスタンスを気にすることなく、歴史を意識しながら、ゆっくりと鑑賞できました。学生時代に戻った感じでした。

在宅勤務も初めての経験です。国内外の出張は言うまでもなく、会議やジャーナルクラブも中止になり、時々電話やオンライン会議があるだけで、複数での会食をとる面談も控えるように指示が出ました。週1回の診療活動は、逆に新鮮に思えるようになりました。しか

し、それが2週間も続くと、椅子やソファーに座る時間が自然に増えたために、明らかな運動不足、特に階段を歩くことが減少したためか、下肢の筋力低下を自覚し始めました。パソコンに向かう時間、読書、新聞雑誌の時間が増え、夜更かしをしたりして日内リズムの乱れも生じ始めています。生活習慣病の診療上の変化も明らかになりました。会食がなくなって予想以上に糖尿病の改善を示した患者さん、間食の増加や運動不足で体重増加や糖脂質代謝の悪化した患者さんです。

グローバル化社会ではウイルス感染症パンデミックは必然であり、Covid-19 大流行が収束しても、また新たな感染症がパンデミックとして繰り返すことは疑いのないことです。市民として国の果敢な緊急事態対策を期待するとともに、この機会に思いがけなく供与された在宅時間をどのように生かすかは、極めて重要な課題です。17世紀のペスト大流行に直面したニュートンは、ケンブリッジ大学休校による在宅勤務の間に故郷に帰り、万有引力発見の着想などの貴重な「創造的休暇」を活用したことはよく知られています。私たちもこの思いがけない在宅勤務の機会を活用して、普段できない活動を試み自宅付近や故郷の山々の自然観察や散策を楽しめてみてはいかがでしょう。新しい発想や今後の活動方針などが生まれるかもしれません。(4ページに続く)

当法人顧問 前理事長
井村 裕夫先生

特別寄稿



しんじいとアドレナリン分泌不全、副腎皮質と髓質の機能的関係を医療現場から考える

山本 智英

八尾協会会員病院

副腎皮質と髓質の機能的関係を知らぬ医師はない。しかし両者の機能的関係について内分秘教科医は皮質と髓質は別々に記載される機能的関係と障害時の症状について記載がなく(知られていない)。

1855年にThomas Addisonが「11例の色素沈着、ない・腫、低血圧、虚脱などの臨床所見と副腎の病理所見を記載、従来アシソン病」と呼ばれている。その後Addisonが報告した症例の一部はたゞ一部を欠く例も見出され、副腎不全が一般に知られる。

私は、これに対して小児副腎不全の病名を提唱した(1)。多い症例は倦怠感や易疲労、心筋強度、食欲不振、無気、下痢などを従来の低血圧や易疲労が多いハイドロコルチゾン(HC)(低血圧時にフルコロルチゾンを併用)の補充後多くの例で症状は1か月後に改善するが一部に倦怠感や易疲労が改善しないものがある。

アシソン病の治療に関する文献をPubMedで探索したところある。副腎皮質(HC)による制御される以前、エフューリンの経口投与が試験的に実施され、エフューリン投与による疲労感の消失、元気が回復すること(2)を知つ。この事実はその後全く忘れられていない。以前、AxelrodとWartimanが「副腎のアドレナリン生成に

関わるphenylethanolamine N-methyl transferase量の維持にコルチゾールに富む血流が必要」の論文(3,4)を読んだことがある。HC補充後の倦怠感や易疲労が消失しない例では生理量の補充だけでは副腎皮質量が維持されず、十分なアドレナリンが産生できない可能性がある。

HC補充後の副腎不全例の血中アドレナリンはホルモン産生能のない副腎皮質と比べて低価で、倦怠感や易疲労が消失しない例ではさらに低価でアドレナリン分泌不全が倦怠感や易疲労に関係すると想われる(5)。

Walter Cannonは大きな脳威に遭遇時に交感神経とアドレナリン分泌を介した反応、fight or flight、を提倡した。現代人は過食動物に襲われる危険はない。著しくアドレナリン分泌により日常生活の精神的、肉体的ストレスが対処されている。この機能が不全になると倦怠感や易疲労が特徴と見られる。アドレナリンの減少は、しんじい症候群を説くバーキンソン病(6)、慢性疲労症候群(7)でも報告されている。

皮質と髓質の機能的関係は表面に異常がなければ分からぬ。皮質と髓質の何れが最初の異常で説明できない症候はnatural experimentであり、皮質と髓質の機能的関係の解明に有用と考える。

引用文献を希望される場合、

toshibiyamamoto@naha-shinkai.jpにメールください。

井村前理事長の学士院院長就任

本NPO法人前理事長の井村裕夫京都大学名誉教授は、昨年10月より、日本学士院にっぽんがくしい会議に就任されました。日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を顕彰するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発展に寄与するための必要な事業を行うことを目的としています。

日本学士院は、明治12年に福沢諭吉を初代会長として創設された「東京学士会院」を前身とする140年の歴史を持ち、学術的な業績をもとに選定された定員150名の会員により組織されています。主な事業として、選賛賞、日本学士賞、エンジニア学会並びに学術奨励賞の授与はじめ、日本学士院紀要の編集及び発行、公團講演会の開催、国際アカデミーとの交流などがあり、国内外に渡り学術の発展に貢献する様々な事業を運営しています。

日本学士院のシンボルマークは、長鳴島(ながなみじま)と桜を組み合わせたものです。「古事記」において「長鳴島」は、知恵の神である恩公神(おもいかね)が天の岩戻戸を開いた時に恵かせたと記され、黎明を告げる鳥として伝えられています。

本認定NPO法人は、井村前理事長の更なるご活躍とご健勝を祈念し、会員の皆様と共にご祝福の意を表したいと思います。そして、本認定NPO法人の目標達成に向けて更なる活動の充実を図りたいと考えています。

特別寄稿

山本 智英

八尾協会会員病院

副腎皮質と髓質の機能的関係を知らぬ医師はない。しかし両者の機能的関係について内分秘教科医は皮質と髓質は別々に記載される機能的関係と障害時の症状について記載がない(知られていない)。

1855年にThomas Addisonが「11例の色素沈着、ない・腫、低血圧、虚脱などの臨床所見と副腎の病理所見を記載、従来アシソン病」と呼ばれている。その後Addisonが報告した症例の一部はたゞ一部を欠く例も見出され、副腎不全が一般に知られる。

私は、これに対して小児副腎不全の病名を提唱した(1)。多い症例は倦怠感や易疲労、心筋強度、食欲不振、無気、下痢などを従来の低血圧や易疲労が多いハイドロコルチゾン(HC)(低血圧時にフルコロルチゾンを併用)の補充後多くの例で症状は1か月後に改善するが一部に倦怠感や易疲労が改善しないものがある。

アシソン病の治療に関する文献をPubMedで探索したところある。副腎皮質(HC)による制御される以前、エフューリンの経口投与が試験的に実施され、エフューリン投与による疲労感の消失、元気が回復すること(2)を知つ。この事実はその後全く忘れられていない。以前、AxelrodとWartimanが「副腎のアドレナリン生成に

会員からのメッセージ

「若手研究者への提言」

若手研究者に対し、研究をする上で私が大切だと思うことを、4つ伝えたい。



花房 審昭

尋常立憲会医療センター名譽院長

1. 研究を楽しもう

2. 出会いを大切に

3. いつも研究のことを考えていよう

4. 実際の世には畢竟であれ

人生においては、何事も楽しむことが大切だと思う。研究も例外ではない。しかし、楽しむために、良き指導者に出会わなければならない。それでは、良き指導者とはどのような人か? 私の定義は簡単。良き指導者は、「一緒にいて楽しい人」それだけ。一緒にいて楽しい指導者とともに研究すれば、当然研究が樂しくなる。それが研究を楽しむ秘訣だと信じる。それに加えて、臨床医として患者さんに出会うことは、良き指導者に出会うのと同じくらい大切だ。患者さんの一言一句、一举手一投足は、我々に研究のヒントを無限に教えてくれる。また、他建設的研究者との出会いも

大切にしてほしい。異なる考え方を持つ多くの人の出会いは、生涯の財産になるだろう。

研究における人間的なフレンドリーのチャンスは、誰にも平等に訪れる。しかしそのチャンスは、準備している人にしか見えない、掴めない。だから、食事の時も、寝る時も、遊んでいる時も、いつも研究のことを考えています。そのような人こそが、チャンスを逃さず掴めるのだ。アルキメデスが、船から溢れ出たお湯を見て、アルキメデスの原理を想起した驚きを思い出すまでもないだろう。

自然の真理は人間の浅はかな考案を毫もに凌駕しており、我々の頭で考えることは、たかが知れている。仮説に合わないから失敗だと思った実験からも、必ず学ぶことはある。それどころか、予想外の結果の中に、しばしばより大きな真実が隠されているものだ。だから、仮説と異なる結果は、仲間からの贈り物だと思おう。真実を貴重に思われる結果は、仲間からの贈り物だと思おう。真実を貴重に思われる結果は、仲間からの贈り物だと思おう。研究者として最も大切にしなければならない心構えだと思う。

若手研究者に幸あれ。

第5回松尾賞の募集と選考

「松尾賞(に、アリウム利坂ペプチド(ANP,ENCP,CP)など多肽のホルモンの発見に大きな功績を残す)」現れるも遺伝の苦境に陥りきっている国立遺伝資源研究センター名譽所長筑波大学名誉教授の松尾謙二と先生のご業績を承え、内分秘代謝部門に贈られる基礎研究者に対する60歳以下の研究者への助成として2016年より創設されました。

現に、第1回「松尾賞」は筑波大学の樋深正史氏、第2回は鹿児島大学の宮田隆郎氏、第3回は久留米大学の黒島晋也氏、第4回は九州大学小川佳典氏に授与されました。

現回「松尾賞」の受賞者は、今平洋介氏に贈られました。7月21日㈯に日比谷野音伊勢佐木町会場にて開催される「第93回日本内分泌学会学術総会」で表彰式と受賞講演を行予定でしたが、開催中止となつたため、表彰式と受賞講演は贈呈式とされた事務をしております。

第93回日本内分泌学会学術総会はWEB開催
テーマは「Endocrine Science」

新型コロナウィルス感染症(Covid-19)の拡大のため、「第93回日本内分泌学会学術総会」会場に備方(浜松医科大学 小糸利次教授)は、2020年6月1日～6日に会場にて開催することが困難な状況になりWEB開催されることになりました。

一般演題に限りてPDFファイルもしくはPowerPointファイルを提出して、会場が確定して参加登録者が閲覧できるようにお處されます。また、教育講演(演説講演)に関してはWEB上で配信し、登録された登録者は内分秘代謝系会員の更新のための単票が付与される予定です。会場の登録方法などの詳細に関しては、今後本ホームページにて静かお願いいたします。

巻頭言

在宅期間中に正しい生活習慣と健康的なホルモン分泌を維持するため大切です。規則正しい生活習慣で、日々リズムの乱れによる低下症状・副腎皮質ホルモン系のACTH・コルチゾール分泌や自律神経の交感神経・副腎髓質系のアドレナリン・ノルアドレナリン分泌の異常をきたさないようにすることが必要です。ソーシャルディスタンスを守って適度な運動を実践し、過剰エネルギー摂取の原因になる間食や過食を避けることは正しい根拠付対策に必要です。ストレスの解消は自然免疫力を高めるために重要で、ACTH/コルチゾール・アドレナリン・ノルアドレナリンは代表的なストレスホルモンとして知られています。

Covid-19大流行に際し、stay homeによるストレスホルモンの分泌亢進は、ウイルス感染に対抗する自然免疫力を抑制し、必要なサルトカイン分泌を抑制しますので、筋力抜けなければなりません。在宅勤務中のニュートンの運動的体験に学び約40歩目に

登った5月の晴れた日の新緑の如意ヶ嶽(大文字山)からの京都のパノラマの光景効果は抜群でした。

また、Covid-19の細胞膜受容体ACE2は、血圧調節ホルモンのレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系を構成する細胞膜タンパク質です。肺機能異常ではACE2発現量の減少が明らかになっており、発現量を減らさず、増加することの治療的意義が注目されています。当初は、高血压治療に使用されているACE阻害剤やアンジオテンシン受容体遮断剤(ARB)服用への影響が心配されました。現時点では国内外の専門家からACE阻害剤とARBの服用禁忌が唱えられています。手洗いの励行、マスク、「3密の防止」だけでなく、ホルモン作用を理解してそれを生かす正しい生活習慣の維持、朝から日リズム、采食、運動、睡眠を重視し、ストレスを発散することにより、Covid-19感染症に対する自然免疫力を高め、創造的依頼を過ごすことができるのです。

2019年（令和元年）の活動報告

- 7月4日(木)～6日(土)「第37回日本内分泌学会内分泌代謝学セミナー」(会長:東洋悟子・名古屋大学)が「進化する内分泌学」のテーマで下呂温泉水泳場(岐阜県下呂市)で開催され、その折九州大学 小川 佳宏教授に第4回「松尾賞」が授与されました。受賞記念講演を実施しました。(News Letter VOL.12参照)
- 「第37回内分泌代謝学セミナー」時の優秀ポスター賞5名に、認定NPO法人日本ホルモンステーションより副賞を支援しました。
- 9月28日(土)「第53回日本小児内分泌学会」(会長:佐藤 寛 大阪市立総合医療センター)で2016年から新設された「日本小児内分泌学会内分泌賞及奨励賞」の副賞を支援しました。
- 10月26日(土)「第10回臨床医学研究懇話会:京都大学医学部会館で開催した。(詳細は、6Page参照)
- 11月30日(土)「第29回臨床内分泌代謝Update」(会長:岩崎 泰正 高知大学教授)のサテライトシンポジウムを協賛し「第1回脂肪萎縮症候群研究会」を開催し、約50人の参加者を得た。(於:高知市文化プラザかるぽーと)
- 第5回「松尾賞」の募集を2020年1月～2月に行った。

2020年（令和2年）の活動予定

- 6月6日(土)WED開催となった「第93回日本内分泌学会学術総会」(会長:猪原 劍 浜松医科大学小児科教授)で、右子研究奨励賞(YIA)に対する助成を行った。(於:アクトシティ浜松コングレスセンター)
- 6月末 第17回認定NPO法人日本ホルモンステーション連合会・懇親会を開催する予定。
- 7月3日(金)「第39回日本内分泌学会内分泌代謝学セミナー」は、開催中止となった。予定していた、第5回「松尾賞」の表彰と受賞講演は別途企画の予定。
- 10月31日(土)「第11回臨床医学研究懇話会」を開催し、CIA(Clinical Investigator Award, 5名)と研究奨励賞を授与する。(於:京都大学芝蘭会館別館)
- 11月14日(土)「第30回臨床内分泌代謝Update」(会長:竹内 健一(虎の門病院 内分泌センター長)で第2回「脂肪萎縮症候群研究会」を開催予定。(於:虎の門王アザワホテル)
- 2021年1月～2月 第6回「松尾賞」募集を行った。

「脂肪萎縮症候群研究会」の発足と今後の展開

部分性脂肪萎縮症候群を中心とした

副委員長就任研究会会長 中尾 一和

昨年11月高知で開催された第29回日本内分泌学会「腎床内分泌代謝Update」のサテライトシンポジウムとして第1回脂肪萎縮症候群研究会が開催され、約50人の参加を得ました。全身性脂肪萎縮症候群以外に、2型糖尿病患者群に潜む部分性脂肪萎縮症候群や臍周性脂肪萎縮症候群の進行観などの報告が増加しており、有効率や診断基準の確立が今後の課題として重要です。認定NPO法人日本ホルモンステーションが、当研究会の事務局をつとめます。

部分性脂肪萎縮症候群は、簡単に言えば、「前腕部、下頸部、大脚部、特に皮膚部にわざって、左右対称の皮下脂肪組織の減少、消失があり、その後の慢性経過(数年から10年以上)の後に、糖尿病(インスリリン抵抗性)、高血糖脂血症、脂肪肝などを呈する疾患」です。四肢が細いことは、若虫を被り、泣泣涙涙する気分ですが、一般診療では多忙なため、常に見落とされています。糖尿病との関係も、レブランの発見とその後発生的意義が採用されるまで全く不明でした。患者さんは、「子供や青年期から腕や足が細く、30-40代で糖尿病になった。」と訴える場合が多いです。中年以後には四肢が細く、体幹が肥満で体幹性肥満(クラシック症候群に似ている)を呈すること少なくありません。部分性脂肪萎縮症候群は、世界で我が国のみで、レブラン細胞治療法が承認されています。レブラン抵抗性の有無で、レブラン細胞治療の有効性が決まると考えられています。(Proc. Jpn. Acad. Ser.B, 05, 538, 2019)。

第2回脂肪萎縮症候群研究会は、本年6月4～5日、浜松で開催予定の第93回日本内分泌学会総会の折に企画しましたがWEB開催に変更されたことより、11月14日(土) 東京で開催予定の第30回日本内分泌学会「臨床内分泌代謝Update」の折に順延の予定です。

「第29回臨床内分泌代謝Update」サテライトシンポジウムを協賛

第1回脂肪萎縮症候群研究会

昨年、11月30日(土)高知市高知文化プラザからはじめて開催された「第29回臨床内分泌代謝Update」(会長:岩崎泰正 高知大学医学部教授)のサテライトシンポジウムを協賛し第1回脂肪萎縮症候群研究会を開催し約50名の参加を得た。



第10回「臨床医学研究塾」-開催報告-

2010年に「認定NPO法人 日本ホルモンステーション」の若手臨床研究者への支援活動として発足した「臨床医学研究塾」は、早く10回目の節目の開催となりました。「第10回臨床医学研究塾」を2019年10月26日(土)に京都大学医学部芝蘭会館で開催しました。10年の節目を迎える今回は、中尾理事長と松澤代表による特別講演が行われました。井村名譽顧問からの祝辞のほか、CIA (Clinical Investigator Award) 下記5名の発表と受賞講演を行いました。受賞者は記念の盾と研究助成が授与されました。

なお、次回「第11回臨床医学研究塾」は、本年10月31日(土)京都大学医学部芝蘭会館別館で開催する予定で準備を進めています。

氏名	所属	発表題名
内田 雄一郎	京都大学 大学院医学研究科 糖尿病・代謝内分泌学分野	Clinical and experimental studies of intraoperative analysis and the development of clinically relevant pancreatic fistula after pancreatic surgery.
山内 一郎	新潟大学 大学院医学研究科 糖尿病・代謝内分泌学分野	Incidence, sources, and prognosis of immune related adverse events involving the thyroid gland induced by immunotherapy.
岡田 鮎志	大阪大学 大学院DN 分子細胞生物学 遺伝子生物学・分子生物学	Paroxysmal nocturnal hemoglobinuria analysis of apoprotein subfractions by gas permeation HPLC in patients with cholesterolemia ester transfer protein deficiency.
中野 啓哉	信州大学 医学部 糖尿病内分泌学	Alteration of β -Adrenergic Signaling in Left Ventricle of Acute Phase Talassemia Syndrome in Human Study.
朱 祐珍	吉野大学 大学院医学研究科 糖尿病内分泌学	Effectiveness and safety of early central cannulation for patients who received surgical temperature management after endotracheal carbon dioxide.



CIA受賞者5名には記念盾と講義として発表者が各自研究発表代表として1冊の研究発表集から選ばれました。

また、5名に研究助成金が授与されました。

日本小児内分泌学会 内分泌学普及奨励賞の支援

2016年から新設された「日本小児内分泌学会 内分泌学普及奨励賞」の開設支援を認定NPO法人日本ホルモンステーションが後援した。

2019年度は、9月28日(土)「第53回日本小児内分泌学会学術集会」(会長 佐藤 华 大阪市立総合医療センター)が京都で開催され、長谷川 茂延 小児内分泌学会副会長理事長(慶應義塾大学)より東京医科歯科大学 小児科 高澤 啓先生に内分泌学普及奨励賞が授与された。



認定NPO法人日本ホルモンステーションの主たる支援活動は下記の通りです

1. 「松尾賞」の顕彰

ナトリウム利尿ペプチド(ANP,BNP,CNP)など多様なホルモンの检测に大いに功績を残され、現在も後進の指導に尽力されている国立循環器病研究センター名誉所長・宮崎医科大学名誉教授の松尾謙之先生の業績を戴え、顕彰。
2. 日本内分沁学会への支援
 - 若手研究奨励賞(VIA)賜付支援
 - 内分沁代謝学セミナーの奨励賞スター賞・賜付支援
 - 著作内分沁代謝Update!市民公開講座の賜付支援
3. 「日本小児内分泌学会」への支援

「内分沁学普及奨励賞」の賜付支援
4. 市民公開講座の開催

一般市民に対する啓蒙と教育を目的として、市民公開講座を開催
5. 「臨床医学研究塾」の開催

次世代を担う若手臨床医学研究者を育成すること目的とした「臨床医学研究塾受賞創刊LCI Clinical Investigator Award(CIA)」と奨励賞を授与する
6. 「脂肪萎縮症候群委員会」の活動

NPO法人 脂肪萎縮症候群(筋筋ジストロフィー)・脂肪萎縮症候群センターの活動を引き継ぎ、認定NPO法人日本ホルモンステーションの「筋筋萎縮症候群委員会」として活動
7. 国内外学会・シンポジウム助成・留学助成など

「活動の輪」の拡大にご協力ください

協議や紹介など、会員各位のご協力をお願いします。

- 入会
賛付
- 会員の
特典

NPOの活動は、個人と団体の会費を交付、さらにボランティアによって支えられています。しかし、法人が目的とする事業活動を展開し、そして維持するためには、会員数およびボランティアの参加人数の増加と会員料の増額が必要です。「認定NPO法人 日本ホルモンステーション」の目的が公衆の増進に寄与することをご理解いただき、さらなるご支援ください。

年会費 正会員 年額1000円

賛助会員 年額一口1000円

寄付金

- 当NPO法人へ3万円以上ご寄付いただいた方は、下記特典が贈られます。
 - ①日本ホルモンステーションが主催する特別会員の懇親会への招待券。
 - ②共管市民公開講座へのご案内、ご招待
- ご本人およびご家族が有する糖尿病、内分沁代謝専門医、甲状腺専門医、臓器疾患専門医、骨粗鬆症専門医、血液疾患専門医などによる健康相談、内分沁代謝疾患に対するセカンドオピニオンが受けられます。
- 1万円以上のご寄付をいただいた方は、講演員会員として下記特典が得られます。
 - ①共管市民公開講座へのご案内、ご招待
 - ②ご本人が希望する専門相談、内分沁代謝専門医、甲状腺専門医、糖尿病専門医、骨粗鬆症専門医、血液専門医などによる健康相談、内分沁代謝疾患に対するセカンドオピニオンが受けられます。

認定NPO法人への寄付は寄付金登録の対象となりますので、当法人が執行する抽選券を添付のうえ申告下さい。
また、会員に対する税金控除の対象となる場合は、下記ホームページをご参照下さい。

内閣府のホームページ <http://www.ntt.go.jp/tetsuzuki/index.htm>

内閣府のホームページ <https://www.npo-homepage.go.jp>

年会費(1,000円) 寄付金の送込方法

年会費・寄付金の郵便振込用紙をご利用ください。

寄付金：専用の郵便振込用紙(会員登録用紙)。または銀行振込(手数料が別途必要です)をご利用ください。

三井UFJ銀行 恵比寿支店(445) 滞留販金口座番号5096270

受取人名：トケイニホンホルモンステーション

認定NPO法人 日本ホルモンステーション 特別会員・評議員会員リスト

(五十音順 *印は物故会員)

特別会員 浅野 秀子、飯田 さよみ、飯沼 和正、家入 蒼生夫、池田 恵一、伊古田 明美、石川 三衛、石塚 達夫、伊藤 公一、伊藤 貞嘉、井端 泰彦、今城 俊浩、井村 裕夫、入江 實、岩久 建志、上田 陽一、内田 健三、遠藤 治郎、大角 誠治、大島 喜八、大山 建司、岡野 匠雄、岡本 正敏、小川 克仁、小川 喜久、小島 元子、小野 美明、影山 甚郷、笠川 光生、片山 茂裕、加藤 茂明、門脇 誠三、金沢 一平、鴨井 久司、寒川 賢治、北村 和雄、木下 康之、木村 時久、日下部 徹、黒川 理樹、郡山 暢之、後藤 伸子、小林 功、近藤 重信、齋藤 壽一、齋藤 史郎*、坂本 敬子、佐藤 匠徳、猿田 享男、塙之入 洋、島崎 淳、島津 章、白水 明代、鈴木 聰、須田 道雄、曾根田 瞬、高橋 英雄、高松 順太、高見 博、武田 成正、竹田 亮祐、伊達 紫、田中 智洋、田中 万三、近森 一正、千原 和夫、出村 博*、寺本 明、土井 拓人、土井 起、徳留 健、豊田 長興、中尾 一和、鍋島 陽一、成瀬 光栄、西大條 靖子、西川 哲男、西野 和義、根本 憲一、野口 志郎*、橋本 浩三、長谷川 奉延、八谷 孝、花田 俊勝、花房 俊昭、林 恭三*、林 達也、肥塚 直美、平田 結喜緒、藤本 保紀、古谷 真優美、朴 賢典、堀井 和子、松井 信夫、松尾 壽之、松倉 茂*、松田 公志、松本 圭史*、松本 俊夫、水谷 哲也、水野 兼志、南野 直人、宮本 薫、村上 治、村下 真理、毛利 虎一、望月 貴博、望月 直樹、森 昌朋、森 美千代、森 潔、森田 浩之、森本 武男、森本 靖彦、泰江 弘文、山下 博、山田 敬行、山本 昌弘、吉田 恒子、吉田 尚*、吉田 信男*、吉田 洋子、吉政 康直、吉木 祥生、和田 浩志

評議員会員 小豆沢 定秀、荒田 尚子、石橋 俊、石丸 忠彦、伊藤 国彦*、稻垣 肇、犬飼 敏彦、井上 金治、井上 啓、猪股 弘明、今川 彰久、巖西 真規、海老澤 高憲、大郷 勝三、岡田 秀一、岡本 新悟、小澤 一史、小野田 栄子、小畠 美由紀、小原 孝男、海瀬 和郎、垣羽 寿昭、加藤 弘巳、金森 晃、唐島 成宙、川野 義長、雉子牟田 道雄、北山 衣子、木村 久一、久保 修、糸 昭苑、児島 将康、小林 望美、近藤 哲夫、坂本 誠、佐久間 康夫、塙野 伸昭、佐藤 和雄、須川 秀夫、杉本 利嗣、鈴木 佐和子、鈴木 光雄、高橋 和広、高橋 倫子、高山 賢一、竹内 靖博、立花 修、田中 一成、田中 利明、田原 重志、辻 和雄、坪井 靖、十枝内 厚次、堤内 敬子、堤内 正美、中井 繼彦、長野 学、二川原 健、西野 精治、則武 昌之、橋本 久仁彦、花田 礼子、林 元子、一二三 宣秀、平井 紀夫、平川 秀三、福岡 秀規、福田 昇、藤井 正、伏見 真知子、堀江 重郎、堀川 玲子、前田 美智子、楳田 紀子、松浦 文三、松下 理恵、松本 幸恵、宮崎 康、村上 正巳、村瀬 寛、村部 浩之、村山 正憲、柳瀬 敏彦、山内 美香、山口 康平、山田 正三、山田 久夫、山田 正信、山本 昌弘、由良 茂夫、横谷 進、吉川 秀樹、吉沢 隆浩、吉田 和哉、吉見 輝也、吉村 弘、綿谷 光子

認定NPO法人 日本ホルモンステーション 役員一覧

理事長	中尾 一和	京都大学名誉教授	監事	櫻井 文昭	アステラス製薬株式会社執行役員
副理事長	寒川 賢治	国立循環器病研究センター名誉研究所長		小田切 齊	大日本住友製薬株式会社取締役
理事	久保井 一匡	元日本弁護士会会長		持田 直幸	持田製薬株式会社社長
	塙野 元三	塙野義製薬株式会社会長		青野 吉晃	日本ベーリングガーネンゲルハイム株式会社社長
	清水 良	田辺三菱製薬株式会社執行役員		松本 俊夫	徳島大学名誉教授
	山口 隆	あすか製薬株式会社社長		小西 郁生	京都医療センター名誉院長
	森 昌朋	群馬大学名誉教授		小川 修	京都大学医学研究科教授
	中山 讓治	第一三共株式会社会長		佐野 安宏	健康加齢医学振興財団理事
	岩崎 真人	武田薬品工業株式会社取締役		土屋 裕弘	京都大学イノベーションキャピタル株式会社取締役

特別顧問	井村 裕夫	京都大学名誉教授、京都大学元総長	顧問	入江 實	東邦大学名誉教授、成長科学協会名誉顧問
	松尾 壽之	宮崎医科大学名誉教授、宮崎医科大学元学長		土井 起	土井公認会計士事務所会長
歴代理事長	初代理事長	吉田 尚		猿田 享男	慶應義塾大学医学部名誉教授
	前理事長	井村 裕夫		松尾 宣武	元国立成育医療センター総長
		千葉大学医学部名誉教授	事務局	中村 泰三(事務局長)	
		京都大学名誉教授、元京都大学総長		青木 達彦	
				加藤 裕子	

(令和元年度)

編集後記

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、会員の皆様におかれましては、大変な状況の中でご苦労されているものと拝察し、心よりお見舞い申し上げます。
本年寒さの残る頃より、感染拡大を防ぐため「三密避ける」、「ソーシャルディスタンス」、「外出自粛」、「STAYHOME」などが叫ばれ、研究活動・学会開催・経済活動・就学が大きく影響を受けるさなか、ご寄稿をいただきました方々のご協力のおかけにより、ようやく「News Letter 13号」を刊行することができました。

今後は、新たな生活様式が求められ、今まで以上にIT活用が進展してまいります。会員の皆様をはじめ、ホルモン研究の発展を支援してくださる皆様の新たなニーズにお応えできるよう役割を果たしてまいりたいと思います。

当NewsLetterに関して、ご寄稿、ご意見、ご要望がございましたらお気軽にメール(npo-hsj@nifty.com)宛て連絡をお願いいたします。(青木 達彦)

News Letter 日本ホルモンステーション vol.13

発行日 ● 2020年6月15日

発行 ● 認定NPO法人 日本ホルモンステーション

〒606-0805 京都市左京区下鴨森本町15番地 財団法人生産開発科学研究所内

TEL:075-708-1080 FAX:075-708-1088 E-mail:npo-hsj@nifty.com URL:<http://www.npo-hsj.jp/>

Vol. 14
December,
2020

第14号

News Letter

日本ホルモンステーション

日本ホルモンステーションは

- ① 内分泌代謝疾患に関する一般市民への啓蒙活動
- ② 若手研究者の育成
- ③ 国際交流

に取り組む認定NPO法人です。

巻頭言

コロナウイルス感染症(COVID-19)と内分泌学



井村 裕夫

京都大学名誉教授
日本学士院院長
関西健康・医療創生会議 議長

2020年という年は、後世に長く語り継がれる年となった。それは思いもよらぬCOVID-19のパンデミックが全世界を席巻し、多数の死者を出したからである。20世紀中葉、抗生物質の開発と予防技術の発展によって、長年人類を苦しめてきた感染症をかなりの程度克服できるようになり、医学は非感染症の時代へと移りつつあると、多くの人が考えるようになったからである。1969年アメリカのSurgeon GeneralであるWilliam H. Stewartが、「感染症の教科書を閉じる日が来た。」と言ったと伝えられていることからも、当時の多くの人の、楽観的な空気を読み取ることができる。しかしそれが大きな誤りであったことを、COVID-19の蔓延によって、痛いほど思い知ったわけである。今後感染症に対してどのように対処していくか、それは大きな課題として残るであろう。

20世紀は医学があらゆる分野で、めざましく発展した世紀であった。内分泌学も例外ではなく、世紀の幕開けとともにアドレナリン、セクレチンが発見され、内分泌の概念が確立された。後半になると多くのホルモン、あるいは類似した様々な情報伝達物質が見出され、それらを用いて生体のすべての細胞が複雑なクロストークをして、恒常性を維持していることが明らかになった。内分泌学もその中心として、大きく発展したといえよう。そこへ今回のCOVID-19のパンデミックがあり、あらゆる学問分野が大きな影響をうけることとなった。感染症に対しても新しい方向を打ち出していく好機であると思われる。生体に常在する細菌(マイクロビオーム)と内分泌代謝系とがどのように相互連絡するのか、常在ウイルスは果たしてどの程度いるのであろうか、いるとすれば、どのような関係を持っているのであろうか。免疫系の老化とホルモンはどのように関係しているのか。ちょっと考えただけでも様々な疑問が浮かぶ。若い研究者は鋭敏な感性で新しい内分泌学の課題を選び、思い切った挑戦をしてほしいと願っている。

会員からのメッセージ

脂肪内分泌学の誕生
とアディポネクチン

松澤 佑次

住友病院 名誉院長

成熟した脂肪細胞は細胞質中に中性脂肪を充満させた球状を呈し、最も含めたすべての細胞小器官は細胞膜近くに偏在しているという形態から考えても、生体の過剰なエネルギーを蓄積し、必要に応じてそれを放出して飢餓から守るために細胞であると信じられていました。この機能も生存のための重要な機能であります。しかし、脂肪細胞がこれまで脂肪細胞として機能せずにいたことが明らかになりました。私たちが、疾患に関連する内臓脂肪と、関連しない皮下脂肪の生物学的特徴を明らかにするために、採用した研究アプローチは、阪大細胞生物学センターの松原健一教授が進めていた、鶴見系細胞それぞれ

に発現遺伝子プロファイルの網羅的分析を用い、それぞれがどのような性質を持つかを明らかにするといういわゆる Body Map Projectによって、脂肪細胞の性質を解明することでした。その結果として、驚くべきことに、脂肪細胞に発現している全遺伝子プロファイルを分析すると、最も大量に発現している遺伝子グループは、分泌細胞をコードする遺伝子で、特に内臓脂肪では全遺伝子の約30%に達しており、多くは、培養因子やオンコシンなど重要な生理活性物質であることが明らかになりました。私たちは脂肪細胞から分認されるアディポネクチンの概念を提唱したのです。この開拓的アプローチで、フリードマン教授によるレセプターの発見があり、またホタキシリジ教授の脂肪細胞由来のTNFαがインスリン抵抗性の原因であるとの研究も脂肪内分泌学の初期の大きな足跡を記しました。さらにこの脂肪内分泌学から発見された新しいアディポネクチンカインであるアディポネクチンの抗糖尿病、抗炎症、抗炎症など多彩な防御機構は、從来のホルモンやサイトカインとは全く異なるもので、今後の研究の進展によっては、さらに新しい内分泌学が広がるかもしれません。期待しているところです。

「外科医と臨床研究」
パラメーターの選択が大切

上本 伸二

滋賀医科大学学長

外科医が行う臨床研究の目的は、手術術式の評価、あるいは手術を含めた集学的治療の有効性の評価です。外科医自らが手を下す手術の良否が治療の有効性(患者の予後)を左右するパラメーターにむねて外科学のモチベーションを高めるのですが、残念ながら通常の結果は患者の全身状態や腫瘍の進行状態など外科学には介入できない患者を取り巻く背景因子が予後決定のパラメーターにならざることが多いのです。

さて、臨床研究において標的対象のパラメーターを何にするかは重要です。私の専門は腫瘍でしたが、成人骨肉腫の術後生存率は80%前後で決して良いものではありませんでした。少しでも成績を改善しようとする種々の術前患者状態を評価するパラメーターを解析しましたが、明らかなリスクとなるパラメーターは

検出できず手術後成績は変化しませんでした。ところが、パラメーターにサルコペニア(骨骼筋の筋肉量)を加えてみるとサルコペニアが大きなリスクであることが判明し、この結果を参考にして術後初期のサルコペニア対策(リハビリ)と栄養を介入させたところ、肺転移術後の敗血症の重症度が低下し術後生存率は95%に飛躍的に改善しました。さらに、この成績を参考にして、サルコペニア因了性症候群の術後予後評価因子に加えてみたところ、肺転移領域悪性腫瘍の摘出術予後(無再発生存率)に術前のサルコペニアが大きくなっていることが判明しました。これらの経験からサルコペニアと免疫機能は相生に関連することが推測され、メカニズム解明のための基礎研究を行っています。

多くの精度研究は統計解析によって結果が導き出されます。

その結果は統計解析という科学によって論理的妥当性は証明

されますが、結果に至るメカニズムは未だのままでつまづ

ります。私が最初に実験したのが、成人骨肉腫の術後生存率は80%前後で決して良いものではありませんでした。

少しでも成績を改善しようと種々の術前患者状態を評価するパラメーターを解析しましたが、明らかなリスクとなるパラメーターは

第5回「松尾賞」表彰式

「松尾賞」は、ナトリウム利尿ペプチド(CNP)(ANP-BNP-CNP)などを多数のホルモンの発見に大きな功績を残され、現在も依然として世界に尽力されている国立循環器病研究センター名誉院長、宮崎県立大学名誉教授の宮崎謙之先生のご業績を称え、内分泌代謝学の基礎研究に大きな収穫(60歳以下)を得た研究者を表彰する目的で2016年より創設されました。

2020年、第5回「松尾賞」は、冬眠様の低代謝状態を説明する新規ペプチド性神経回路の完成、哺乳類に広く保存されている神経ペプチド Q neurotrophin-induced hypometabolism を通じて、通常非眠示しない動物に冬眠様状態を説明する上を明らかにされた、阪大医学医療医学生産医学講師、宮崎謙之先生が受賞されました。

櫻井教授は、1989年阪大医学医療医学生産医学講師、宮崎謙之先生が受賞されました。阪大医学医療医学生産医学講師、櫻井武筑波大学教授を経て、筑波大学医学医療医学生産医学講師、櫻井武筑波大学教授に就任、2016年より現職。

第5回「松尾賞」は櫻井 武 筑波大学教授に

本年7月3日に予定されていた第38回日本内分泌学会内代謝マーチミーは開催中止になったため、第5回「松尾賞」に決定した櫻井 武筑波大学(筑波大学)の表彰式は宮崎謙之先生が神経の国立循環器病研究センター内サイエンスガーデンで行われました。受賞講演はTMFC特別演説として表題:寒川賀智、中尾 和光先生のもとおこなわれ、オンラインで配信されました。

櫻井教授受賞記念講演要旨

冬眠中の動物は正常時の数%まで酸素消費量が低下し、呼吸量に応じて、運動の変化に適応することが可能であり、組織代謝を伴うことなく自然界的元の状態に戻る。このような制御された低温代謝は、組織の酸素需要を減らすことが出来ます。低温では、心筋梗塞・冠心病・脳梗塞・ショック・低気圧など、他の酸素供給が組織需要に追いつかないときにしばしば問題となる。冬眠動物のように生体の酸素需要を安全に低下させることがであれば、酸素供給のスマート化を目指すことができるため、冬眠の動物志向が活用されています。

本研究において、マウスの視床下部の一部の前駆視床下部に存在する神経ペプチドQRFPを発現する細胞を特異的に標識すると、マウスの体温が数時間で大きく低下し、併せて代謝も著しく低下することを明らかにしました。この神經集団を神経ペプチドQRFPを発現する低代謝組織群と名づけ、「QRFP+視床下部群」と名づけました。この神經集団を神経ペプチドQRFPが制御していることが明らかになりました。QHICにおいては体温セトボイントが低めで、していることが明らかになりました。QHICマウスの体温は著しく低下しているものの、通常よりも低い体温で、運動の変化に適応すべく運動行動に制御されていることが明らかになりました。体温セトボイント低下により、寒冷判別に適応した体温制御という機能は、各個中の冬眠動物においてのみ報告されています。しかし、QHICは冬眠に似た低温耐性低体温状態であることが示唆され、QHIC群と未眠群群を用いて、種々の行動実験を試みたところ両群に差はみられませんでした。また、QHICを同一条件下で強制的に行うことも可能であることが明らかになりました。QHICは可逆性のものである低代謝状態であることを明らかにしました。QHICを



調導する詳細なメカニズムを探った結果、QHICは主に視床下部背側脚間に作用していることが明らかになりました。

QHICは視床下部に広く分布していることから、「QHICは視床下部に保存された、熱感受性作用する低代謝組織群である」という仮説を立て、これを検証するために、日内体温も行わないラットを用いたところ、ラットでもQHICが低温になると発現されました。

本研究によって、哺乳類に広く保存されているQHICは温熱的に制御することで、通常冬眠しない動物に冬眠様状態を説明できることが明らかとなりました。ひいてはヒトでも冬眠を説明できる可能性がある小窓が開けた。

され、本研究は下記論文としてNature 11 June (2020) に掲載されました。

Takahashi, T.M., Saito, G.A., Sugi, S., Abe, M., Sakurai, K., Ishikawa, K., Yamagishi, M., Iwasa, H., Hosogawa, E., Miyawaki, A., Sakimura, K., Tsuchihashi, M., Sakurai, T. A discrete neuronal circuit induces a hibernation-like state in rodents.

☞ 第11回「臨床医学研究塾」—開催報告—

2010年に認定NPO法人日本ホルモンステーションの着手研究者への支援活動として発足した「臨床医学研究塾」は、10年の節目を越え新体制のもと第11回「臨床医学研究塾」(10月31日(土))に京都大学医学部附属病院で開催されました。

松澤代表の開会の挨拶のほか、今回新設された推薦奨励賞の3名の講演に引き続き、CIA(Clinical Investigator Award)受賞者による5名の発表と受賞講演を行いました。受賞者には記念の盾と研究助成が授与されました。

氏名	所属	論文名
馬場 洋吉	九州大学病院 内分泌代謝・糖尿病内科	Role of Aldosterone and Postassium Levels in Sparing Confirmatory Tests in Primary Aldosteronism
大野 淳一	京都大学大学院医学研究科 腎臓病・内分泌・炎症内科学	Nadir Aldosterone Levels After Confirmatory Tests Are Correlated With Left Ventricular Hypertrophy In Primary Aldosteronism
佐々木 祐伸	慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科	Associations of birthweight and history of childhood obesity with beta cell mass in Japanese adults
林 令子	大阪大学大学院 医学研究科 内分泌・代謝内科学	Glucocorticoid Replacement Affects Serum Adiponectin Levels and HDL-C in Patients With Secondary Adrenal Insufficiency
橋 知明	京都大学大学院医学研究科 肝臓科・移植外科	Surgery for Recurrent Hepatocellular Carcinoma: Achieving Long-term Survival



CTA受賞者5名には記念の盾と賞として奨励金が松澤代表より贈呈されました。また、7名にも研究奨励賞が授与されました。

なお、特別講演としてJCRファーマ株式会社 藤井本部長 莉川博之氏を迎えて「日本癡・世界初の血液脳関門透析技術を用いた希少疾患治療薬の創薬」のテーマで同社が取り組んでいる興味ある研究発表を頂いた。

2020年(令和2年)の活動報告

- 6月4日(木) 第5回「松尾賞」の選考委員会(選考委員長: 萩川賀治)のもとZoomによるWeb会議形式で開催し、筑波大学 櫻井武教授が選ばれました。
- 本年度第17回「認定NPO法人日本ホルモンステーション」理事会・総会は、COVID-19の感染拡大の中でもやむを得ず書面による平成31年・令和元年度事業報告および収支決算の承認を行いました。また、令和2年度事業計画についても書面にて承認を行った。
- 本年7月3日に予定されていた第38回日本内分泌学会内分泌代謝リマーカセミナーは開催中止になったため、第5回「松尾賞」に決定した櫻井 正教授(筑波大学)の表彰式は松尾南二先生所縁の同刊『頭頸部頭頸部研究センター』内サイエンスセンターで行われた。受賞講演はTMFC特別講演として施長・萩川賀治、中尾一和先生のもとおこなわれ、オンラインで配信されました。
- 第54回日本小児内分泌学会学術集会は、2020年日本小児内分泌学会特別学術集会としてWeb開催されました。その折、選考委員会において審査会で審査の結果、2020年7月から小児内分泌賞受賞者半額の寄付金半分(セラムアンドバイオニア小児科)が選定され、副賞を支援しました。
- 10月31日(土) 第11回「臨床医学研究塾」を京都大学医学部芝園舎で開催しました。
- 2020年YIA受賞者発表式は、11月13日(金)「第30回臨床内分泌代謝Update」(会長: 竹内晴博(虎の門病院 内分泌センター長))の上で行われ、「認定NPO法人日本ホルモンステーション」は成長科学協会と共に副賞を支度しました。
- 第93回日本内分泌学会学術集会(会員・候補方: 浜松医科大学小児科教授)で選考された10名の着手研究奨励賞(YIA)の表彰式は11月13日(金)「第30回臨床内分泌代謝Update」(会長: 竹内晴博(虎の門病院 内分泌センター長))の上で行われ、「認定NPO法人日本ホルモンステーション」は成長科学協会と共に副賞を支度しました。

☞ 第21回 2020年度(令和2年度)日本内分泌学会YIA受賞について

WE開催となった第93回日本内分泌学会学術年会(会長: 稲田 雄一 浜松医科大学小児科教授)前日YIA選考委員会が開かれ(審査委員10名の着手研究奨励賞(YIA)が選考された)。

表彰式は11月13日(金)「第30回臨床内分泌代謝Update」(会長: 竹内晴博(虎の門病院 内分泌センター長))のもとで行われ、「認定NPO法人日本ホルモンステーション」は成長科学協会と共に副賞を支渡しました。



赤坂 善久代表現役医とマイスター賞・学会賞・IRIA賞・研究奨励賞・成長科学文賞・YIA受賞者及其幹事一同

氏名	所属	講題名
植原 良太	東海大学大学院医学系研究科 内科学系 内分泌代謝内科	糖尿病性脳梗塞の新たな極となり得る近位脇粗管における新規オートファジー活性化
今西 寛平	名古屋大学 病態生物学研究所 分子代謝研究分野	NASHにおけるカッパー-細胞代謝と脂質代謝の関係
江藤 未来	静岡大学 病態生物学研究所 内分泌代謝研究科	TRH-TSH-甲状腺系制御機構の構成下部 TRH ニューロンの責任細胞は標的下部受容体である-PVN 神經元 TRH ノックアウトマウスの作製と解析
武見 駿	青梅大学医学部 腎臓病態学教室	アドレナリニン-RAMP3 受容体拮抗剤、飲食連続性酵素嚢泡(CAF)におけるボトランチンの発現と抑制し、難治性転移を抑制する
出口 ハンナ	千葉大学大学院 医学研究科 内分泌代謝・老年内科学	細胞細胞分化における Glutaminase 2 の役割解明
中村 勝斗	大阪人文学部基礎医学系研究所 内分泌代謝研究室	神経細胞におけるアディポネクチン/T-カドヘリシンの意義
櫻澤 哲	東京医科歯科大学大学院 医療社会保健科 分子内分泌代謝学分野	Fibroblast growth factor (FGF) 21 表現子特異的 DNA 既メチル化によるエピゲノム変異と癌細胞および動物の樹立
深石 真大	群馬大学生体調節研究所 分子代謝研究分野	群馬大学生体調節研究所 分子代謝研究分野
村上 正泰	ミュンヘン大学	MALDI-FT-ICR-MS を用いたオーリング質量分析による精斑細胞の納藻類
森 健太郎	山梨大学医学部 内科学講座 第3教室	メラノコルチソン 4 型受容体シグナルを介した血管瘤発症抑制の分子機構

2020年(令和2年)～2021年(令和3年)の活動予定

- | | |
|------------|--|
| 2021年1月～2月 | ● 第6回「松尾賞」審査を行う。 |
| 4月24日(土) | ● 第94回日本内分泌学会学術年会(会長: 山田正信(群馬大学)、若手研究奨励賞(YIA)に対する副賞支援を行う。(※: Gメタセ群、高崎市) |
| | ● 第6回「松尾賞」選考委員会を開催する。 |
| 7月9日(金) | ● 第39回内分必代謝セミナー(会長: 田中知明(千葉大学教授)で優秀ポスター賞の贈賞実施と第6回「松尾賞」の表彰と受賞講演を行。(※: 横川グランデホテル 千葉県横川市) |
| 10月30日(土) | ● 第54回日本小児内分泌学会学術集会(会長: 田島敦志(自治医療大学とちぎ子ども医療センター)で「日本小児内分泌学会 内分泌学者及奨励賞」の贈賞支援を行う。 |
| 11月6日(土) | ● 第12回臨床医学研究塾を大阪で行う。 |
| 11月27日(土) | ● 第31回臨床内分泌代謝Update(会長: 大畠高一 大阪大学教授)で市民公開講座に協賛支援する。 |

「脂肪萎縮症候群研究会」今後の展開

部分性脂肪萎縮症候群とは？

脂肪萎縮症候群研究会会員/認定NPO法人 日本ホルモンステーション理事長
京都市立大学メドカルノバージンセンター/京都大学名誉教授 中尾一和

過食ではあり、飢餓では瘦せるとは、古来よく知られています。

また、時々肥満や貧弱の外見では、「部分的に脂肪を付けています。豊かにし、部分的に不要な脂肪を減らさせませんか？」などのご婦人の切実なご質問を受けた場合があります。

脂肪萎縮症候群は、低食量とは無関係に脂肪組織の萎縮、減少が起り、脂肪組織の有する脂肪質代謝調節機能障害による懶散症、高中性脂肪血症、脂肪肝などを呈する症候群（病因の異なる疾患の集合）です。発症時期による先天性と後天性、脂肪萎縮の分布に基づく全身性と部分性を区別して、4群に分類されます。即ち先天性全身体、先天性部分性、先天性（家庭性とも言ふ）と後天性部分性です。疫学統計上は、全身性脂肪萎縮症候群は我が国を含めて国際的にも100万人に1人発症する超稀少疾患と考えられており、我が国には、凡そ100人程度の患者数と考えられています。一方、左右対称性に身体の一部の脂肪萎縮を呈する部分性脂肪萎縮症候群は、粗筋少疾患とされ、誰子診断が可能なタイプですが、病因や病態は最近まで不明で、稀少疾患であるため疫学統計的研究はなく、実態はほとんど知られていませんでした。

1990年代に脂肪細胞はレブチンなどのアゴボカインを産生する内分泌器官であることを明らかにされ、身体で最大の内分泌器官の一つと考えられています。ですから脂肪細胞により脂肪組織が萎縮すると、カルモン欠乏が起こります。レブチンは、脂肪細胞から分泌されて脳の視床下部にある視床下部に作用して胰島素を起すホルモンですから、脂肪細胞によるレブチンの欠乏は、胰島素が減弱し、過食を起します。正常な脂肪組織の場合は遺伝にならず、高度の肥満になりますが、脂肪萎縮症候群では脂肪

細胞の機能異常があるために脂肪は肥満にはならないのです。

全身性脂肪萎縮症候群は、横対称のレブチン欠乏の病気です。一方、部分性脂肪萎縮症候群は、四肢を中心とした脂肪組織が左右対称的に萎縮する疾患群であり、相対的レブチン欠乏を呈する疾患群です。従って軽度の消瘦感の減少で徐々に過食が進展し、30歳台以後に糖尿病、高中性脂肪血症、脂肪肝などを高率に発症します。厚病は典型的な部分性脂肪萎縮症候群の女性患者さんです。顔は丸顔、体幹部、脚も脚筋や腹部は肥満を示し、四肢の脂肪萎縮と体幹部の肥満が混在する体型を示します。肩背皮質機能のコントロール分権過剰によるクッシング症候群に似た体型を示します。この部分性脂肪萎縮症候群の患者さんが予想を超えて潜在している可能性が中尾らの研究で明らかになりました。また、脂肪萎縮症候群はレブチン欠乏が病根ですから、レブチン補充治療が有効であり、世界で我が国でのみ部分性脂肪萎縮症候群へのレブチン補充治療が承認されています。この症候群の病因、病理、診断、治療の大きな進歩が目前に迫っています。



第2回脂肪萎縮症候群研究会(後援:認定NPO法人 日本ホルモンステーション)開催予定

第94回日本内分泌学会学術総会サテライトシンポジウム

テーマ「部分性脂肪萎縮症候群はCommon Disease?」

1. 必報演者 中尾一和、白山医科大学 研究員

山内 一郎 京都大学健康科学分科会委員会内閣「部分性脂肪萎縮症候群の日課」

田中 智津 名古屋市立大学 「MDP症例の診断とレブチン補充治療の効果」

白下智一 京都医療センター 「部分性脂肪萎縮症候群の日課」

小林大輔、齊山大学

II Topics 齊藤、岡山大学 和田一洋

コスミック 菊地一謙 「高選択的レブチン阻害薬の開発」

九州大学 小川 伸宏 「遺伝子型レブチン抗体とスマートの臨床応用」

III State of Art Lecture 齊藤、九州大学 小川伸宏

京都大学 中尾一和 「部分性脂肪萎縮症候群の疫学・研究、YOTS研究」

日時:4月20日金曜日17時~18時 場所:「Gメッセ群馬」



第1回脂肪萎縮症候群研究会
2019年1月30日
「翁の時代内玲代講演会」
(会長:岩崎泰正教授 高知大学)
サテライトシンポジウム

認定NPO法人日本ホルモンステーションの主たる支援活動は下記の通りです

1. 「松尾賞」の顕彰

ナトリウム利尿ペプチド(ANP,BNP,CNP)など多数のホルモンの危険性に大きな功績を残され、現在も後進の指導に尽力されている国立循環器病研究センター名譽所長・巨野医師大学名誉教授の松尾忠之先生の業績を称え、激励

2. 日本国内分泌学会への支援

●若手研究奨励賞(PTA)賞賛支授
●内分泌代謝学マーケティング優秀スター賞賛支授
●鹿児内分内分泌Update(市立会員震災)の支援

3. 「日本小児内分泌学会」への支援

「内分泌学習及頸面賞」の賛賛支援

4. 市民公開講座の開催

一般市民に対する啓蒙と防諭を目的として、市民公開講座を開催

5. 「臨床医学研究祭」の開催

次世代を担う若手臨床医学研究者を育成すること目的として、臨床医学研究祭・優秀LClinical Investigator Award(CLIA)に奨励賞を授与する

6. 「脂肪萎縮症候群委員会」の活動

NPO法人 脂肪萎縮症候群(脂肪ジストロフィー)・脂肪萎縮性糖尿病センターの活動を引き継ぎ、認定NPO法人日本ホルモンステーションの[脂肪萎縮症候群委員会]として活動

7. 国内外学会・シンポジウム助成・留学助成など

「活動の輪」の拡大にご協力ください

協議や紹介など、会員各位のご協力をお願いします。



年会費 正会員 年額1000円

賛助会費 年額1000円

寄付金

●当NPO法人へ3万円以上ご寄付いただいた方は、下記特典が得られます。

①日本ホルモンステーションが主催する特別会員の研修会への招待。

共催セミナー開催への内閣、招待

②ご本人およびお子さまが希望する専門医療相談、内分泌代謝専門医、医療産専門医、糖尿病専門医、骨粗鬆症専門医、末梢血管疾患などによる健診相談、内分泌代謝疾患に対するセカンドオピニオンが受けられます。

●1万円以上のご寄付をいただいた方は、評議員会員として下記特典が得られます：

①共催セミナー開催への内閣、招待

②ご本人が希望する健診相談、内分泌代謝専門医、糖尿病専門医、骨粗鬆症専門医、末梢血管疾患などによる健診相談、内分泌代謝疾患に対するセカンドオピニオンが受けられます。

認定NPO法人への寄付は寄付金控除の対象となりますので、当法人が発行する領収書を添付のうえ申告下さい。

また、寄付者に対する報酬上の差違処置につきは、下記ホームページをご参照下さい。

国税庁のホームページ <http://www.nta.go.jp/tetsuzuki/index.htm>

内閣府のホームページ <https://www.npo-homepage.go.jp>

年会費(1,000円)・寄付金の送金方法

年会費・寄付金の電子化登録をご利用ください。

寄付金：専用の「寄付払込票」印鑑欄に印字なし、手数料は無料)、または銀行振込(手数料が別途必要です)をご利用ください。

お問い合わせ：認定NPO法人(446) 認定NPO法人 口座番号6566279

受取人名：トクヒニヨンホールモンステーション

認定NPO法人 日本ホルモンステーション 特別会員・評議員会員リスト

(五十音順 *印は物故会員)

特 別 会 員 浅野 秀子、飯田 さよみ、飯沼 和正、家入 蒼生夫、池田 恵一、伊古田 明美、石川 三衛、石塚 達夫、伊藤 公一、伊藤 貞嘉、井端 泰彦、今城 俊浩、井村 裕夫、入江 實、岩久 建志、上田 陽一、内田 健三、遠藤 治郎、大角 誠治、大島 喜八、大山 建司、岡野 匠雄、岡本 正敏、小川 克仁、小川 喜久、小島 元子、小野 美明、影山 甚郷、笠川 光生、片山 茂裕、加藤 茂明、門脇 誠三、金沢 一平、鴨井 久司、唐島 成宙、寒川 賢治、北村 和雄、木下 康之、木村 時久、日下部 徹、黒川 理樹、郡山 暢之、後藤 伸子、小林 功、近藤 重信、齋藤 壽一、齋藤 史郎*、坂本 敬子、佐藤 匠徳、猿田 享男、塙之入 洋、島崎 淳、島津 章、白水 明代、鈴木 聰、須田 道雄、曾根田 瞬、高橋 英雄、高松 順太、高見 博、武田 成正、竹田 亮祐、伊達 紫、田中 智洋、田中 万三、近森 一正、千原 和夫、出村 博*、寺本 明、土井 拓人、土井 起、徳留 健、豊田 長興、中尾 一和、鍋島 陽一、中村 泰三、成瀬 光栄、二川原 健、西大條 靖子、西川 哲男、西野 和義、根本 憲一、野口 志郎*、橋本 浩三、長谷川 奉延、八谷 孝、花田 俊勝、花房 俊昭、林 恭三*、林 達也、肥塚 直美、平田 結喜緒、福岡 秀規、藤本 保紀、古谷 真優美、朴 貴典、堀井 和子、堀川 玲子、松井 信夫、松尾 壽之、松倉 茂*、松田 公志、松本 圭史*、松本 俊夫、水谷 哲也、水野 兼志、南野 直人、宮本 薫、村上 治、村下 真理、毛利 虎一、望月 貴博、望月 直樹、森 昌朋、森 美千代、森 潔、森田 浩之、森本 武男、森本 靖彦、泰江 弘文、山下 博、山田 敬行、山本 昌弘、由良 茂夫、吉田 恭子、吉田 尚*、吉田 信男*、吉田 洋子、吉政 康直、吉村 弘、吉本 祥生、和田 浩志

評議員会員 小豆沢 定秀、荒田 尚子、伊澤 正一郎、石井 角保、石橋 俊、石丸 忠彦、伊藤 国彦*、伊藤 善也、稻垣 毅、犬飼 敏彦、井上 金治、井上 啓、猪股 弘明、今川 彰久、巖西 真規、海老澤 高憲、大郷 勝三、岡田 秀一、岡本 新悟、奥野 美佐子、小澤 一史、小野田 栄子、小畠 美由紀、小原 孝男、海瀬 和郎、垣羽 寿昭、加藤 弘巳、金森 晃、唐島 成宙、川野 義長、雉子牟田 道雄、北山 衣子、木村 久一、久保 修、桑 昭苑、鯉淵 典之、児島 将康、小林 望美、近藤 哲夫、坂本 誠、佐久間 康夫、笹野 伸昭、佐藤 和雄、須川 秀夫、杉本 利嗣、鈴木 佐和子、鈴木 光雄、高橋 和広、高橋 倫子、高山 賢一、竹内 靖博、立花 修、田中 一成、田中 利明、田原 重志、辻 和雄、坪井 靖、十枝内 厚次、堤内 敬子、堤内 正美、中井 繼彦、長野 学、西野 精治、則武 昌之、橋本 久仁彦、花田 礼子、林 元子、一二三 宣秀、平井 紀夫、平川 秀三、福田 昇、藤井 正、伏見 真知子、堀江 重郎、前田 浩子、前田 美智子、横田 紀子、松浦 文三、松下 理恵、松本 幸恵、道上 敏美、宮崎 康、村上 正巳、村瀬 寛、村部 浩之、村山 正憲、柳瀬 敏彦、山内 美香、山口 康平、山田 正三、山田 久夫、山田 正信、山本 昌弘、横谷 進、吉川 秀樹、吉沢 隆浩、吉田 和哉、吉見 輝也、綿谷 光子

認定NPO法人 日本ホルモンステーション 役員一覧

理 事 長	中尾 一和	京都大学名誉教授	櫻井 文昭	アステラス製薬株式会社執行役員
副理 事 長	寒川 賢治	国立循環器病研究センター名誉研究所長	小田切 齊	大日本住友製薬取締役
理 事	久保井 一匡	元日本弁護士会会長	持田 直幸	持田製薬株式会社社長
	澤田 拓子	塙野義製薬株式会社取締役副社長	青野 吉晃	日本ベーリングガーネンゲルハイム株式会社社長
	清水 良	田辺三菱製薬株式会社執行役員	松本 俊夫	徳島大学名誉教授
	山口 隆	あすか製薬株式会社社長	小西 郁生	京都医療センター名誉院長
	森 昌朋	群馬大学名誉教授	小川 修	京都大学医学研究科教授
	中山 謙治	第一三共株式会社会長	監 事 佐野 安宏	健康加齢医学振興財団理事
	岩崎 真人	武田薬品工業株式会社取締役	土屋 裕弘	京都大学イノベーションキャピタル株式会社取締役

特 別 顧 問	井村 裕夫	京都大学名誉教授、日本学士院院長	顧 問	入江 實	東邦大学名誉教授、成長科学協会名誉顧問
	松尾 壽之	宮崎医科大学名誉教授、宮崎医科大学元学長		土井 起	土井公認会計士事務所会長

歴代理事長	初代理事長	吉田 尚	千葉大学医学部名誉教授	事 務 局	中村 泰三(事務局長)
	前理事長	井村 裕夫	京都大学名誉教授、日本学士院院長		青木 達彦 加藤 裕子

(令和二年度)

編集後記
流行語大賞2020は「3密」が受賞した。本賞はこの1年の間に発生したさまざまなかほりのなかで、軽妙に世相を衝いた表現とニュアンスをもって、広く大衆の目・口・耳をにぎわせた新語・流行語を選出するのです。「News Letter第14号」編集のなか、「3密」が「年間大賞」に輝いたことで、あらためて新型コロナウイルスの感染防止を目的とする新概念・新習慣に立ち戻り、日常生活の中で襟を正すよう警鐘を鳴らしているように思えてなりません。

2020年の状況が単に通過点となり、皆様にとりまして健全で安心して暮らせる日常が戻ることを願っております。

私どもは、会員の皆様をはじめ、ホルモン研究の発展を支援してくださる皆様の新たなニーズにお応えできるよう役割を果たしてまいりたいと思います。

当NewsLetterに関しまして、ご寄稿、ご意見、ご要望がございましたらお気軽にメール(npohsj@nifty.com)宛ご連絡お願いいたします。(青木 達彦)

News Letter 日本ホルモンステーション vol.14

発行日 ● 2020年12月23日

発 行 ● 認定 NPO 法人 日本ホルモンステーション

〒606-0805 京都市左京区下鴨森本町15番地 財団法人生産開発科学研究所内

TEL:075-708-1080 FAX:075-708-1088 E-mail:npohsj@nifty.com URL:<http://www.npo-hsj.jp/>